

## 作品概要

### 梅崎春生「風宴」

初出：『早稲田文学』新人創作特輯号（1939年8月）

語り手の「私」は怠惰な生活を送る帝大生。「私」はある日、友人である天願氏の下宿先でその娘の死に直面し、通夜にまで参加することになる。「死」や生きることへの不安、悲しみ、退屈な日常から抜け出すことができない「私」の苦悩を描き出した作品。

## 研究概要

梅崎春生の作品で多く描かれるテーマ：「死」「不条理」

「風宴」以前の作品→「死」への不安感のみ  
「風宴」以降→生きることの**不条理性**への意識に発展

本作では不条理がどのように描かれているか？あるいは描かれていないか？

「私」が抱える不条理＝頹廢的な生活からの脱出が不可能であるという現実

〈「私」の不条理への向き合い方の変化〉  
不条理な現実から目を逸らすような態度  
→不条理を認め、その中で生きていくという生き方へ

## 1. 当時の時代背景と「風宴」

時代背景（昭和10年代）＝日中戦争（昭12～20）

しかし…  
作中に戦争を思わせる記述なし

先行  
研究

戦前の梅崎の作品には「社会から背を背け、世の中を見まいとする態度」が見られる（戸塚麻子）

→その根底には？  
当時流行していたシュエストフの影響か

シュエストフ：哲学者・批評家。合理主義を批判。不条理な存在としての人間を語った。

「虚無よりの創造」の中でチェーホフの社会に対する無関心主義を指摘

→「風宴」の「私」との共通性

梅崎の随筆（「ランプの下の感想」）で言及

☆社会的問題より「死」や「不条理」といった人間の本質的な問題に対する意識の強さ  
→社会状況を感じさせる内容が書かれていないことに繋がる

## 2. 死と不条理への意識

「風宴」以前の作品（「死床」など）

「死」をテーマにしたものが多い  
不条理への意識は見られない

「風宴」以後の作品（「桜島」「狂い風」など）

自分の意志と関係なく、偶然によって人生が左右されるという人間の**不条理性**が描かれる

「風宴」に見られる不条理

- ・死体を掘り出す夢  
「それを掘り出さねばいけないというので」  
→「私」の意志の欠如
- ・娘の死と通夜の宴会  
「私は自分の意志をうしなって天願氏の後にくっついてとある部屋に入っていった」
- ・生活を改める決意と泥竜館への回帰  
「しかしその夜遅く、私は**不思議な力**にひかれて、再び泥竜館の玄関に立った」

☆作品を通して、自分の意志と関係ないものの力によって人生が左右されるという不条理な人間観が表現。

## 3. 「私」と天願氏と旅川

〈「私」と天願氏の違い〉

**天願氏**「頹廢なら頹廢でもいい、そうした一つの心境に五年も十年も身をひそめていれば、そういう青くさいことは言わなくなるもんだ」  
→頹廢を肯定も否定もしない

**私**「今日も学校になかった！ 胃のあたりに苦さを感じながら私は呟いた。こういう生活を毎日つづけて一体どうなるのだろう」  
→頹廢的生活を続けていくことへの不安・焦燥

〈「私」と旅川〉

「私」

旅川は馬鹿野郎だ

（旅川以外の人々にも軽蔑するような視線を向けることも）

しかし…  
・実際に旅川にそのような態度をとることはない  
また

- ・喫茶店でビールを飲む帝大生を見て幸せそうだと思う場面
- ・普通の生活をする人々の風景を見て涙を流す場面

→普通の生活への憧れ・羨望

## 4. 不条理と向き合う「私」

私の意志

頹廢から抜け出したい

現実

「不思議な力」によって泥竜館へ

天願氏「此の人が学校に出ないのは、自然とそうなったからさ」  
「私」原因なんてないのかもしれない

「私」の頹廢に**原因はない**という結論

自分の意志と無関係に、偶然によって人生が決定つけられるという**不条理性**

〈不条理に対する向き合い方の変化〉

天願氏の指摘に対し、学校に出ないのは色々事情があるのだと反論  
↓  
不条理な運命から目を逸らす態度

「どのみち退屈を食ってしか生きられない男だ」  
↓  
不条理な運命を見つめ、その中で生きていく姿勢

カミュ「生きるとは不条理を生かすことだ。不条理を生かすとは、なによりもまず不条理を見つめることだ」（カミュ『シシュエポスの神話』）

本作を通して「私」がたどり着いた生き方